

名前：

インターネットが世界中に普及した現代社会では、様々な情報が飛び交い、私たちはますます正しい情報も自ら吟味していく必要にせまられることとなった。インターネット上には政治や経済などの社会的情報を初め、スポーツや天気予報、芸能情報や人気のお店までの地図といった、老若男女に受け入れられる情報が日々絶えることなく流されている。情報収集のための一つの手段としてインターネットは非常に便利で能率のよいものと言えるだろう。

しかし私はこれほどまでに莫大な利用者をインターネットが独占していることに、ある種の危機感を覚える。私たちはインターネット上の情報をあたかも絶対に正しいものとして受けとめがちだが、果たしてそれで良いのだろうか。

特に危険な種類に属する情報は、その情報を流した（あるいは執筆した）人の意見である。政治や経済に対する評論家の見解を例に

とると、私たちはついその意見を鵜呑みにして、さも自分の意見であって絶対に正しい意見であるかのように思っているのではないだろうか。その意見はたまた一人の評論家の意見であり、それに同調してしまうのはあまりに安易ではなからうか。

刑事事件のレポートなどをとってみると、容疑者に非常に悪いイメージを植え付けようとしていくかのような表現を見かけることがある。ここにも執筆者の感情が込められているのだが、それに惑わされることなく、容疑者の本当の姿を見極める必要があると思う。

インターネット利用人口の増加の裏で、新聞や雑誌を読む人が減少する傾向にある。インターネットからの情報を信用しすぎず、同じことについて新聞や雑誌ではどう述べられているか、さらに言えばA社の新聞ではこう述べられているが、B社、C社はどうかだろうか、そうすることによって一つの事柄に対して様々な見方から考えることができ、さらにはそれ

1800字

らの情報を踏まえた上での独自の考え方を
 もつことが出来るかもしれない。
 インターネットが普及しすぎることの危険
 性とは、意見の偏りである。仮に一つの情報
 を世界中の大多数の人々が信じたらどうなる
 だろうか。それはまるで一種の宗教のように
 、情報を享受する者が情報を流した者の思っ
 ままに動くという現象が起こりうる。このま
 までは、かのオウム心理教の事件のようなこ
 とが起きたり、果つには日本に再び軍隊が設
 置されるとい、たいまわしいことにつながる
 恐れがある。情報の偏りを防ぐため、今こそ
 新聞や雑誌の重要性を見直す必要があるのだ
 はなだろうか。